

被
爆
記
録

一、醫科大學の部

原爆遭難記

外科学教室

調 来 助

昭和二十年八月九日、今日も朝から日本晴れの上天気で、見渡す限り雲一つない。昨夜は防空当直で病院に泊つたが、幸いに何事もなく無事にすんだ。ホツとしたさわやかな気持で六時起床、六時半に同じ当直の内藤（達）教授、梅田教授、医専木戸教授、葉専杉浦教授達と調理所の二階で朝食をとる。

雑談の暇もなく、七時に空襲警報が発令された。直ちに当直学生を本館前に集め、欠席の高瀬教授に代り簡単な点呼を行つて、各自部署につく。敵機の音は聞こえない。九時に空襲警報が解除され、引き続き警戒警報に入つた。ゲートルのまゝ第二中講堂で医専三年の講義をすまし、帰りに中講堂の前を通つたら、角尾学長は十時を過ぎたのに未だ熱心に講義の最中であつた。

自室に帰つて徳永君（広島原爆で死亡）の論文を書いていると、突然けたたましい爆音が耳に入つた。時計を見ると丁度十一時、すぐに立ち上総砲白衣を洋服に着換え、取るもの取りあえず部屋を出ようとする。廊下の所で「ピカッ」と青白い光が目についた。「やられたッ」と直感

して手洗台前の部屋の隅っこにうずくまる、同時に「ボン」と陰にこもつた低い音がして、「ドドドッ」と激しい家鳴震動、「ガラガラッ」という物の壊れる音、頭といわず背中といわず、何か落ちて来て体にぶつかる。「アッ」という間にすつかり埋もれて了つた。だが背中の中の物は案外に軽い。思い切つてそつと立つてみたら、わけもなく立ち上がれた。目を開くとあたりは真の闇で何一つ見えない。又かぶんだ。「ザアーツ」と大雨のような音がする。多分噴き上げられた土砂の落ちる音である。暫くじつとしていると、この音も静かになつたので、又立上つて目をあけて見た。今度は夜明けのようにボンヤリと明るい。辺りを見まわすと、机も戸棚もベツドも、衝立も、みんな横倒しに倒れて、その上に天井が覆いかぶさり、足の踏み場もない。机の前に行つて見た。今まで書いていた原稿も、机の上に置いてあつた鞆や時計、本なども何処にかふつとんだかさつぱり判らない。足許に表紙のちぎれた手帖が一つ見つかつたので、ポケットに捻じ込んだまゝ急いで部屋を出た。廊下も階下も落下物で雑然としている。然し幸いに難なく階下におりることができた。東の出口に来ると、二三日前に手術したばかりの虫垂炎の女が、男に助けられながらフラ／＼して立つている。見ると別に怪我はない。「大丈夫だ。私についておいで」と叫びながら調理所裏の防空壕に走つた。汽罐庫はつぶされ、中で「シューシュー」と蒸気のもれる音がする。前のタタキの上には人が二三人倒れて動かない。窓の枠にぶら下つ

て死んでいるものも居る。何だかさつぱり訳がわからない。

調理所の角で古屋野教授と出会った。顔に血条が見えるが、いつものようにニコニコしておられる。「御無事で」と挨拶したまゝ防空壕にとびこんだ。中は人が一ぱいで、よく見ると調外科の荒木看護婦がいる。

左前腕に大きな傷を受けていたので、ハンケチを出してくくつてやつた。壕を出て本館に向つた。人がなだれ出て来てとても入れそうにない。

ためらつていると調外科の佐藤君(仮卒業生)が片手に杖をつき、片手に佐藤看護婦を支えながら出て来た。皆の安否を尋ねると、大したこともなく先に待避したとの答えに安心して、二人を励ましながら裏山に登つた。

テニスコートではまつ先に長谷川教授に会つた。白衣を着たまゝフラフラしている。肩間に傷があるが大したことはない。次に古屋野外科の石崎助教授が、顔や腕一面に火傷を受け、這いながらやつて来た。「調先生」と悲しそうな声で呼ぶ。「何処にいたんだ」と聞くと、「自分の部屋にいました」と力なく答える。長谷川教授と一緒に待つているように云いおいて、更に東病棟に向つて走つた。高南に近づくると木戸君が元氣な笑顔で上つて来た。「よかつたナ」と互に無事を喜び合つているところに、「調先生」と泣き乍ら村山婦長が駆け上つて来た。顔と前腕に火傷を受けているが、石崎君ほどではない。「ヤア、よかつた〜」。みんなで一緒に上の方へ行こうと、村山を助けながら引返したが、長谷川教授も、石崎君も、最早テニスコート附近には見当らなかつた。

避難者達はなだれをうつて、金比羅山の坂を登る。昨日まで青々と繁つていた甘藷畑は、茎も葉も何処へとび散つたのか、丸裸になつて地肌を露はしている。樹は倒れ根元から折れて、葉は一枚もついてない。中

腹に建ててあつた感化院は倒壊して已に一部から火を発していた。後をふり返ると、病院も町家も、基礎教室も、木造家は全部潰れて、既に濃々とした煙に包まれている。友を呼ぶ声、わめく声、救いを求める声等々、辺りは阿鼻叫喚の巷と化して凄惨この上もない。丸裸となつて焼け爛れたもの、顔は黒く煤けて目ばかりきよろつかせているもの、衣服がずた／＼に破れちぎれて、俊寛僧都のような格恰をしているもの、怪我で血塗磨のように紅に染つたものなど、まるで地獄絵でも見るようだ。

丘の中腹にかゝつた頃、右下の畑の方から自分の名を呼ぶ声が出た。

角尾学長が負傷して山へ上つて来ておられるらしい。村山達には先に行くとように命じて、段々畑を横つ飛びに声を頼りに走つた。学長はと見ると、一番下段の畑に篤島助教授、高橋講師、前田婦長たちに看護られるが、仰臥して居られたが、顔は蒼白でシャツは鮮血に染まつている。「怪我はどこです?」ときくと、「ウン、左手と左足を少しやられた」との答えだ。声に力がない。「しつかりして下さい」というと、「大丈夫だ」と云はれる。左大腿の傷は、ガラス破片による切創で、少し出血していたので手当りの三角巾で包帯し、シャツがいかにも気持悪そうだったので、自分のノータイを脱いで素早く着替えさせてやつた。

火の手はますます勢を逞しうし、風にあふられた火の粉がさかんに飛んで来る。差当り学長を丘の上に移すことにし、一番元氣そうな高橋君に背負はせて、自分が道案内となり丘を登つた。途中右往左往する遭難者に救いを求められ、「お母さん」とか、「水を下さい」とか、「助けて〜」など喚めき叫ぶ声に耳を塞ぎながら、上へ／＼と畑の畔を辿つたが、学長は「動くと思貧血が来て吐きたくなる」と云つて時々嘔吐を催

される。中々道ははかどらない。炎上中の感化院を迂廻して丘の頂きについたのは午後一時頃であつたらうか、時計をなくしたのできつぱり時刻がわからない。

丘の上につくと学長を丸裸になつた畑の上に寝かした。風が強くて寒そうだ。誰かぶ布団を一枚持つて来て呉れたので、二つ折にしてそれに学長を移した。間もなく角尾内科の大倉君も元気でやつて来て、芋の蔓で擬装して呉れた。

この頃風が變つて、山から下の方へ吹き出した。煙が来なくなつて下界の景色が手に取るように見える。看護婦寄宿舎、病院廊下、基礎教室、大学本部など火に包まれてメラ／＼と燃えている。窓から焰を吹き出している病棟もある。時々大橋兵器の方に当つて火薬の爆発する音が聞える。町は一面火の海で、「ポウ／＼」、「パチパチ」という焼け音が丘の上まで響いて来る。太陽は赤茶けたいやな色をして、人の頬も夕焼に染んだように、黒ずんだ赤灰色を呈している。誰かぶ救急袋を持つて来た。中に沃丁のアンブレがあつたので、学長の傷の手当をした。頭に二ヶ所、左大腿に四ヶ所、手に二ヶ所、相当大きな切創があり、背中は一面のガラス傷だ。痛いのを我慢して貰つて、全部に沃丁を塗つた。傷からいうと決して心配になる程の傷ではない。最早嘔吐も来ず、気分もよくなり、顔色は次第に生氣を取り戻して来た。

午後三時頃、風が又變つて時雨みたいな雨が降り出した。山上の負傷者は雨と風とで、皆寒そうにふるえている。自分は暇を見て、谷を越え向ふの丘へ弘治（私の次男）の行方を探しに出かけた。山陰に白い布団にくるまつた石崎君が横たわつていたが、一人では運ぶこともできない。

路々には手もつけられないような重傷者が何人となっていて、殆んど声を出す元氣さえない者が多い。学部四年の奥君らしいのが崖下に横たわつていたが、失神したのか呼んでも答えない。草から垂れる雨垂れが、顔中に落ちかゝつても払おうとしない。もう間もなく駄目になるだろう。医専三年の上野君は頭に包帯していつも程元氣がないが、それでも甲斐々々しく友達の介抱をしていた。自分は「弘治」の名を呼びながら精神科裏の山まで迷い歩いたが、何の返事も無い。調外科の日高君（仮卒業生）も協力して探して呉れたけれど、矢張り駄目であつた。多分講堂の下敷となつて、そのまゝ焼け死んだことであろう。

やがて学長のいる丘の上から自分と呼ぶ声が出た。「永井先生の出血が止まらないから来て下さい」という。走つて帰つて見ると、永井助教は畑に横わり、左耳の前に無数の「コツヘル」がぶら下つている。施君（物療科助手）に代つて止血を試みたが、血管が深いので却々挾めない。仕方なく圧迫タンポンを施し、その上から縫合して止血した。麻酔薬なしの手術に顔色一つ変えない永井君の忍耐には感服のほかはない。手術がすむとすぐに立上つて助手及び看護婦の一隊を引きつれ、丘を下つて行つた。学長の処に帰つて見ると、別に異状はない。誰かぶ南瓜を割つて造つた容器に氷の破片を入れて持つて来た。学長も咽がかわくのか、美味しそうに食べて居られた。

午後四時頃だつたか医専三年の香田君が、高木教授を背負つて登つて来た。何処にも怪我はないが、顔色が悪く元氣が全くない。聞けば解剖の教授室で遭難し、幸に逃れ出て運動場を横切り、浦上天主堂の方へ這つて行つたが、川辺についたとき力が尽きて歩けなくなつたところを、香

田君に助けられたのだという。学長の側に寝かした。続いて菓専の清木教授がパンツ一つで杖をつきながら上つて来た。壕掘りの最中に遭難し、幸い壕の中にいたので爆死は免かれたが、飛んで来た材木で腰を強打されたとのこと、なるほど火傷も創傷もないが、随分痛そうに見える。

夕方江上君（耳鼻科助教授）と川本君（菓局）とが正装してやつて来た。二人とも滑石にいたため難を免れ、火中を抜けてよう／＼とどりついたとのこと。救急材料を持って来て二三人治療していたが、その内又姿が見えなくなつた。

雨もやみ、辺りは夕靄に包まれはじめた。風は少し風いだようだ。下界は火事が益々猛烈となる。夜に入るにつれて火の赤さが増し、見える限りは火の海だ。金比羅山を越す者もと絶え、丘で野宿する者も大体一定の位置に落着いた。学長、高木教授等は、感化院上の丘でそのまゝ一夜を明かすこととなり、学内関係者及び一般負傷者の一部がその周囲にたむろした。その他永井助教授等は崖下の小屋に、皮膚科の満島婦長等の一行は穴弘法寺の右下方の畑の中に、看護婦の一団は穴弘法寺の前庭に、学生及び看護婦達の一群は穴弘法寺下の倒壊民家の庭に、それ／＼一かたまりとなつて、励まし合いながら暗い寂しい夜を迎えた。

夜に入ると風は全く風ぎ、空は晴れ渡つて星が降るようになつていて。月がなく、辺りは真暗でさだかには判らない。驚愕と緊張とですつかり忘れていたが、昼めし抜きの腹が急に鳴り出した。皆も嘔空腹を覚えてることだろうと思うと、可哀そうで堪らない。

丁度その時、町の救護本部から乾パンの箱が届いたので、自分はこれを抱えて各屯所に配給してまわつた。昼間見定めていた小徑を頼りに、

人の影を探し求めつゝ小袋を一つずつ渡して行つたが、暗い露天に淋しくしょんぼりと起臥している様を見ては、胸がつかまつて慰めの言葉一つかけることができない。問はれるまゝに友の情報を伝えつゝ、最後に穴弘法下の民家にたどりつくと、此処では学部四年の安東君が隊長となつて、大きな釜に白米の御飯を炊いていた。それを四、五人の元氣な和服姿のお嬢さん達が手伝つている。聞くと三菱の挺身隊の人達だそうで、思はず感激させられた。火があるだけに此処だけは明るくて暖い。

学生達と遭難の模様を語り合つている内に、祖父江教授が近くの畑に一人動けないでいることが判つた。名を呼びながら探し求め、肩で支えて学生達の所まで連れて来た。傷は軽いが、高木教授と同じように、とても苦しらしい。藁をしいて火のそばに寝かし、後のことを学生達に頼んだ。

やがて御飯ができたので、結びをつくつて乾パンの箱につめ、安東君と二人で、それを配給しながら学長のところに引返した。道はますます／＼暗く、五、六丁の処が三十分以上もかゝつたらう。もう十時をまわつたかも知れない。皆は黙つてはいるがまだ寝つかれないらしい。学長にお結びをさし上げると、大変おいしいそうに一つ二つ召し上がったので、この分なら大丈夫だろうと安心した。下界の火事は大分下火になつたが、赤い火で焼け残りの窓がすいて見え、昔華やかなりし頃の長崎の街は、こうでもあつたらうかと想像されるほど美しかった。

夕食が一段落を告げたので、元氣な者一同崖下の畑に集り、火を焚き暖を取りながら明日なすべき事も協議した。話は却々尽きそうもないが、夜も深くなつたので一同散会し、自分は永井君の勧めに従つて、物

療科急設バラック内の藁の上に身を横たえた。

天を仰ぎながら、静かに今日一日のことを追想すると、まるで夢のようである。ピカツと光ると共に世は一瞬にして混乱の巷と化し、無数の人々が傷つき倒れ、或はそのまゝ死んでしまった。自分達は漸うにして難を逃れ、この山上に駆け上つて来たが、病院も市街も焼けて了い、帰るべき取場もなく、明日から一体どうしたらよいか。今日会つた学長、古屋野教授、高木教授、長谷川教授、祖父江教授達は別として、他の教授達の安否はどうか。弘治は基礎で講義中だつたに違いないが、うまく逃げてくれたかしら。精一（私の長男）は大橋兵器に行つていた筈だが、これはどうだつたらう、無事でいてくれよばよいが。それにしても疎開先の滑石では、色々と心配していることだらう」等と、頭は走馬燈のようにぐる／＼まわつて却々寝つかれない。

その中敵機が来て道の尾方面に一回爆弾を投下した。小さいものらしい。又頭上にも一つ空中で爆発する小型爆弾を投下したが、別に何の異状もなかつた。自分は暫く耳をすまして警戒していたが、その後は敵機の襲来もなく、夜は静かに更けていつて、何時とは知らず眠りにおちた。多分午前一時頃だつたと思われる。』

以上は私が当時心覚えに書き留めておいた遭難手記の一節である。手記はなお続いているが、余り冗長に亘るので要点だけを拾つて見よう。

学長は翌日西山の御自宅へ担架でお連れするよう勧めたが、背ぜられないので止むなく大病院焼跡へ案内した。そこへ折りよく元気な古屋野教授の顔が見えたので、学長代理として復興に努力するよう後事を託され、その後二三日間古屋野外科裏の横穴防空壕で、高木教授、山根教

授、石崎助教授等と共に過ぎた。然し、こゝでは充分な治療が施せないで、古屋野教授に凶り、私は十日午後疎開先の滑石に帰つて町内会長に交渉し、適当な救護所（滑石大神宮の拝殿と岩屋クラブ）を借り受け、十二日夜学長と山根教授を大神宮の拝殿に、学生、看護婦等三十余名を岩屋クラブに收容した。負傷者の予後は極めて悪く、山根教授は十五日に破傷風を併発して鬼籍に入り、学生や看護婦達も約半数は次々に後を追つて死んで行つた。

当時滑石郷には、数百名の負傷者が入り込んでおり、これらを木戸助教授、調外科看護婦九名、及び医専三年生数名と共に巡廻診療し、一時は目のまはる程の忙しさであつたが、一週間前後でその大半は死亡し、私の長男も大橋兵器で火傷を受け、元気で帰つていたのが、十六日正午に永眠した。

学長は滑石大神宮拜殿の畳の上で、一時大いに元気を恢復されたが、十日目頃から所謂原子爆弾症が増悪し、二十二日午前十時、令夫人（西山在住）、令弟（現昭和医大の角尾滋教授）、古屋野教授、其他教員諸君に看とられながら、眠るが如く他界された。「巨星地に墜つ」。これは学長の御臨終に列席していた私の偽らざる感想である。実に学長は敬虔なる学者としても、敏腕なる政治家としても、共に申し分なき天分を持たれ、我が長崎医科大学を雙肩に担つて、教育界に重きをなされていた。若し学長が無事であつたら、長崎医大の復興に更に大きな役割を演ぜられたであろうことは、強ち私一人の謬見ではないであろう。

負傷者達の救護も一段落ついたので、私は家族一同と浦上解剖学教室焼跡を尋ねて、次男の遺骨を拾い、九月初めから愈々大学復興の大事業に

参画しようと思つていた矢さき、私自身も亦原子病にやられて病牀に呻吟する身となつた。約一ヶ月間生死の間をさ迷つたが、大学再建の緒につくべく、未だ癒えぬ身を大村海軍病院に運んだのが九月二十六日、米軍衛生官ホーン大尉の厚意により、元新興善小学校を貰うけて、こゝに長崎医大附屬病院建設の業を興したのが十月四日、かくて我々は古屋野新学長の統率の下、全員一致協力して本学の再建に邁進し、幸いに偉大なる成果を收めつゝ今日に至つたのである。

それからすでに四年余り、グビロガ丘の頂には古屋野学長の麗筆になる大理石の慰靈碑が聳え、坂本町、岩川町、浜口町、その他見はるかす浦上一帯の焼野原には、今や陋屋ながら復興の新築が建ち並んで、車馬の往来、人の動き、最早や四年前の面影は見るべくもなく、再建日本の姿は我が長崎医科大学の復興と共に、愈々活潑となりつゝあるのを覚える。

「わが大学に永遠に幸あれ」と祈りつゝ原爆思ひ出の筆を擱く。(昭和二十四年十一月二十三日、原爆遺族会の集りの日)

X X X

以上の原爆遭難記で被害の概要は会得出来ると思うが、尙書き洩らした点につき、私の知つているだけのことを記してみよう。

当時長崎医大にいた職員及び学生の総数は詳らかでないが、原爆死亡者は、グビロガ丘の慰靈碑にも刻まれているように、八百五十余名の多きに達した。そのうち基礎教室方面にいたものは死亡率が殆んど一〇〇%で、助つたのは雨天体操場裏の横穴防空壕で仿っていた小使三名位なものである。之に反し、病院の方は私が調べたところでは死亡率が四二、三%で、半数以上は助かつてゐる。これは全くコンクリートのお蔭

と云つても差支ないと思う。

当時在籍の医大教授は基礎九名(生化学欠員)、臨牀一〇名、風土病一名、合計二〇名で、基礎では病氣のため鳴滝の自宅で静養中の竹内教授を除き、残りの九名が犠牲となり、臨牀では出勤者七名の中、角尾学長(内科)、内藤教授(産婦人科)、山根教授(眼科)の三名が死亡、古屋野、北村(現東大皮膚科教授)、長谷川(現大阪市立医大教授)、調の四教授が幸運にも九死に一生を得、高瀬教授は北高湯江、影浦教授は諫早、佐野教授は螢茶屋に居て被爆を免れられた。他界された教授方の当時の模様を略記すると、概そ次の通りである。

角尾学長(内科)

十時過ぎまで中講堂で講義、其後外来に行つて新来患者(女、即死)を診察中に被爆、頭、背中一面、左大腿、左手等に硝子傷を負われ、黄副手、物療科の女清技術雇及び施副手補等に助けられて洗濯所裏の段々畑に仰臥中、箆島助教授、高橋講師、前田婦長等がかつけつけ、私も呼ばれて傷を診察した。其后感化院の丘で一夜を明かされ、十日朝大病院焼跡に下りて古屋野外科手術場裏の横穴防空壕に收容され、十二日夜トラックで滑石の岩屋クラブに行き、十三日早朝リヤカーで滑石大神宮拝殿に移られた。其後の経過は

十三日 左手背の創化膿しリンパ管炎を併発す、熱三八度八分。

十四日 リンパ管炎は治療により少しく軽快したるも熱下らず、軽度の下痢加わる。

十五日 熱三九度〇分、下痢続く。

十六日 下痢止む、但し解熱せず、咽喉痛を訴う。口内炎を發し食物摂取は疼痛のため困難となる。

十七日 創は乾燥して汚色を呈し、皮膚に光沢なし。

十八日 熱四〇度五分、食欲次第に減退す。

十九日 熱四一度〇分となり、口内炎は益々悪化する。

二十日 全身に皮下溢血斑を生じ全身倦怠甚し、熱下らず。

二十一日 午後五時頃より意識少しく混濁し来り、胸内苦悶を訴う。

二十二日 意識混濁し、一般状態悪化して午前十時遂に鬼籍に入る。

同日午後遺骸を浦上に運び、外来本館の玄関階段に安置して通夜を行い、翌日告別式を行った後、テニスコートで荼毘に附した。

学長は滑石大神宮に御病臥中、汗が出たら熱が下ると思うが汗が一寸も出なくて困るとか、今度の爆弾は普通と違つて何かほかにある、爆弾プラスXだとか、或は奥様に向つてしみじみと、病気が癒つたら茨城に帰つて開業でもしようねなどと云われたが、その言葉は今もありありと耳に残つて忘れることが出来ない。又自分のことは放つて置いて、側に寝ている山根教授の身辺を何かと氣遣われ、あゝせよ、こうせよと指図されたことも、到底我々には出来ない御仁慈の發露と深く感銘している次第である。

山根教授(眼科)

眼科教室の便所から廊下に出たところで被爆された由、私が初めて教授を見たのは十日午前十時頃、精神科下の狭い横穴防空壕内に寝て居れる時であつた。学生達と一緒に教授を外に出してみると、顔面から下

顎部にかけて縞の着物をさいた布で包帯がしてあり、之をとると下顎部に大きな裂創があつた。簡単な消毒を行い包帯を換えて、強心剤一筒を注射した。

其後三日間外科裏の防空壕に收容、十二日夜角尾学長と一緒に岩屋クラブに運び、十三日早朝滑石大神宮拝殿に移した。其後の経過は

十三日 意識明瞭、発熱なく、化膿も殆んど認められず、一般状態も漸次回復しつつありしに、本日午後より軽度の牙關緊急あらわる。

十四日 牙關緊急高度となり、全身痙攣発作を見るに至る。角尾学長の命により学長所持の破傷風血清四〇兎を注射す。

十五日 痙攣発作は次第に頻数となり、食事を摂る能わず、意識次第に混濁し、午後七時過ぎ遂に鬼籍に入る。

十四日だつたが、自ら死期を悟られたと見えて酒を所望されたが、戦争のこととて酒がなく、止むを得ず教授の言葉に従つて五〇％アルコールを作つて差上げた。しかし喉頭痙攣のためにどうしても、どを通らない。前田婦長に頼んでネラトンを食道に挿入しようとしたが、これも痙攣が起るので自ら取り去つて了い、どうしても駄目かねと弱々しい言葉を洩らされたのは誠に痛ましかつた。夕方になると村の人達が参詣に来て鈴をならしたが、其度毎に強い痙攣発作が起つて苦しみました。これも痛ましい思出の一つである。

内藤教授(産婦人科)

二三日の間は色々のデマがとんで、生死の程も全く判らなかつたが、

十二日午後、外科東病棟（現放射線科教室）で古屋野教授と事務打合せをやつている時、学生の松瀬君が「婦人科病棟の廊下に内藤先生らしい屍体がある」と報告して来た。同時にポケットにあつたと云う万年筆、手帳、シガレットケースなどを持参したので、みると手帳は電車の定期で、明らかに「内藤勝利」の名が記してあり、間違ないものと思われた。早速かけつけてみると、婦人科一階の廊下は焼け残つていて、天井から大きな梁が落ち転がつている中に、上着、巻ゲートルをつけて海老のように曲つた屍体があつた。よく見ると皮膚は黒ずみ、瘦せていた同教授とは思われぬ程ブクブクに太つて、すぐ側の白壁には手型の血痕がついている。恐らく歩いて逃げる途中梁が頭上に落下して頭蓋骨折並に脳挫傷を受け、失神したまま死亡されたのであろう。全身が腫れていたのは、死後二日を経過したため腫脹したものと想われた。

高木 教授（解剖）

大要は原爆遭難記の通りであるが、九日夜を感化院の丘で明かした翌十日、角尾学長と一緒に大学焼跡に下し、古屋野外科手術場裏の防空壕に收容した。十一日午後は教授の希望により、学生の担架隊を召集してお宅へお連れしようとしたが、一般状態が悪く、到底輸送には耐えられないと思われたので、其儘佐野教授にお願ひして壕内で治療し、次記の如き経過で十一日夕方他界された。

九日 午後三時診察、胸内苦悶を訴え、脈搏細小頻數、顔面蒼白、熱なし。

十日 一般状態依然として不良、回復の微なし、食欲全くなし、流

動食も摂取せず。

十一日 午後に至り不安状態を呈し起臥常ならず、脈搏益々微弱となり、呼吸も促迫す。但し意識は明瞭なり。強心剤投与、其他種々の治療も加えたるも、午後七時遂に鬼籍に入る。

池田 教授（解剖）

永らく行方不明のまま殆んど忘れられていた十一月、不思議にも大学の慰霊祭が経専で行われた日に、ミイラ化した教授の頭とズボンのベルトが祭場に持ち込まれた。顔面には教授の面影がありと残り、ベルトには片仮名で書いたイケダの三字が判読された。屍体は山里小学校附近の丘にあつたそうで、近所の人の話を聞いても、生前に「自分は医大のものだ」と云つて居られたとか、三カ月を経過した慰霊祭の日に、屍体となつて再び大学に帰つて来られるとは、誠に奇縁と云うべきであろう。

梅田 教授（病理）

教授も暫らく行方不明となつていたが、数日後病理講堂の教壇のあたりにあつた半焼屍体の傍から煙草の缶が発見され、同教授が平素マドロスパイプと缶を携えて居られたところから、教授の屍体であることが判つたとの事である。これも一つの奇縁と云つて差支ないであろう。

国房 教授（法 医）

十日朝基礎の焼跡を巡回した時、法医の教授室と思われる焼跡に半焼

屍体が一つ転がつていた。私は確かに国房教授に違いないと思つて合掌して其処を去つたが、十一日に大学に行くと、同教授が皮膚科の地下室に收容されていることを聞きかけつてみた。打撲傷だけで何処にも傷はない。奥様がつき添つて缶詰の空缶に水を入れ頭を冷して居られた。熱が高くて焼けるようだとの事だったので、私は大きなバケツに清水を充たして持つて来てやつた。其日は元氣をつけて其儘別れたが、夕方学生の手架で自宅に帰られ、佐野教授の治療を受けつつ十六日に死去されたとの事である。

後で聞くと、教授は九日朝裁判所に行き、十時半頃大学に帰つて山木事務官の部屋で話している時に被爆し、家屋の下敷となつたが漸う這い出して焼死を免れたとの事であつた。

祖父江教授(薬理)

原爆当日のことは既に前に書いたが、其後螢茶屋の佐野教授宅に引取られ、手厚い看護を受けながら十六日夕方死亡された由を聞いた。

仄聞する所によると、教授は八日の夜行で学生と一緒に東京に帰られることになつてしたが、広島市の被爆で切符を売らないので止むを得ず翌日に延ばし、学生は八日朝十時の汽車でたつたが、教授だけ夜行で行くこととなり、自室のソファアに横たわつていたところを被爆されたとの事である。尙八日に電報が打つてあつたので、遺族の方々は永らく教授の死亡を信じられなかつたと云う話を耳にした。

金子教授(風土病)

十日朝本原町の神学校附近で路傍に倒れて居られる由を聞いたので、かけつけて呉れた南高有家町青年団の人達に頼んで大学に收容しようとしたが、行方が判らないと云つて其儘引返して来た。其後教授の消息は全く判つていない。

清原教授(生理)

内藤教授(細菌)

大倉教授(衛生)

以上の三教授は皆教室内で被爆、其儘焼死されたので、遺骨も判然としないままに打ち過ぎた。誠にお氣の毒の至りである。

× × ×

建物の損害は今日大部分修理され或は取り壊されたため判然としなくなつたが、基礎も病院も木造建築物は全部倒壊した後焼失した。内科と耳鼻科との中間にあつた物療科などは、疎開のため解体してその材木が積み重ねてあつたが、それまで綺麗に焼けて了つた。

コンクリート建の部分は内部が焼けた所と、破壊されただけで焼け残つた所とがある。基礎では所々にポツンポツンとコンクリート建の部分 が立ち残つていたが、生化学実習室の一部を除いた外は全部内部まで焼けていた。此等の大半は既に取り壊されて、今日残つているのは図書館

の書庫と生化学実習室の二つだけである。書庫は残るだろうと思つて教室の書籍を全部持ち込んだにも拘らず、窓が開放されていたためこれも焼けてしまつた。

病院は大部分がコンクリート建だつたので、倒壊は免かれたが内部は殆んど焼けて、唯部分的に破壊だけに止つたところが見られるに過ぎない。一番焼け方の少なかつたのは眼科と精神科で、書籍なども大部分残つたのは幸であつた。しかし顕微鏡などは何時の間にか姿を消して紛失し、使用に耐える器械は一つもなく、長崎医大の全体が烏有に帰したと云つても敢て過言ではない。誠に慘憺たる状態であつた。

(昭和三〇、九、三)